

令和元年6月20日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16736

研究課題名(和文)日本語と朝鮮語の局所的F0低下現象に関する実験研究

研究課題名(英文)An experimental study of local F0 downtrends in Japanese and Korean

研究代表者

宇都木 昭(Utsugi, Akira)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：60548999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：「今朝つくった料理を捨ててしまった。」のような文においては、「今朝」が「つくった」を修飾するという解釈と「今朝」が「捨ててしまった」を修飾するという二通りの解釈が可能である。この二通りは、特定の部分でピッチ(音声の高さ)を低下させることで区別される。これがこの研究で扱う局所的F0低下現象である。このような現象は様々な言語に観察されるが、その実現の仕方や質的な際については、十分に検討されていない。本研究では、日本語と朝鮮語(韓国語)を対象として、この現象を研究した。分析に当初の予想以上に難航しており、まだ明瞭な結果を報告するには至っていない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、二つの点で貢献の可能性を持つ。第一に、韻律の理論的研究に対して貢献しうる。様々な韻律モデルにおいて、局所的F0低下現象が韻律ユニット(音調句、中間句など)を規定するものとして位置づけられているためである。第二に、より社会に密接なところでは、音声教育(例えば、朝鮮語(韓国語)母語話者に対する日本語音声教育や日本語母語話者に対する朝鮮語音声教育)に貢献しうる。現象の言語間の差異が外国語の発音の不自然さにつながりうるためである。もちろん、音声教育に生かすには、言語間の差異や外国語音声の特徴の解明のみならず、どのように教えることで発音を矯正しうるかという観点からの研究も将来的に必要なことになる。

研究成果の概要(英文)：Kesa tsukutta ryoori o sutete simatta.

This Japanese sentence has two interpretations. In the first interpretation, kesa ("this morning") modifies tsukutta ("cooked"); "I threw away dishes which I cooked this morning." In the second interpretation, kesa modifies sutete simatta ("threw away"); "This morning I threw away dishes which I cooked (some days ago)." These two interpretations can be distinguished by compressing pitch in some parts. I call this phenomenon "local F0 downtrends." Although this phenomenon is observed in many languages, there have been fewer studies on phonetic differences of local F0 downtrends and categorical (phonological) differences of this phenomenon among languages. This research project focused on local F0 downtrends in Japanese and Korean. Since I take more time than expected, I have not reported clear results yet.

研究分野：音声学・音韻論

キーワード：韻律 イントネーション ダウンステップ 音調 日本語 朝鮮語 韓国語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語東京方言には、ダウンステップ (downstep) という現象が存在することがよく知られている。これは、有核語の後でピッチレンジが縮小し F0 が顕著に低下する現象である。フォーカスや統語構造の影響を受けることがよく知られており、とりわけフォーカスの置かれた語 (フォーカス語) の後でダウンステップが生じる一方で、フォーカス語はピッチレンジの縮小をリセットする (フォーカス語よりも前にある有核語の影響によりダウンステップすることはない) ことが知られている。このような現象は、発話全体にわたって F0 が低下する自然減衰 (declination) とは区別される。

興味深いことに、フォーカス語の後でピッチレンジが縮小する現象は、東京方言以外の日本語の方言にも多く観察されており、また、日本語以外の言語にも多く観察されている。例えばソウル方言をはじめとする朝鮮語 (韓国語; 日本の言語学において広く用いられる呼称として、以下では「朝鮮語」と呼ぶことにする) の諸方言についても、報告がある。

一方で問題となるのは、このように何らかの要因 (例えばフォーカス) により局所的に F0 が低下する現象 (ここでは「局所的 F0 低下現象」と呼ぶ) について、言語・方言間でどのような共通点と相違点があるかである。例えば、日本語東京方言と近畿方言の現象は、表面的には類似していても、低下の程度に違いがあり、また、質的にも違いがある可能性があることが指摘されている。この質的な違いは、現象が音韻的なものであるか音声的なものであるかという観点から論じることができよう。しかし、この観点からの実験にもとづく検証は十分になされていない。これは日本語と朝鮮語の比較においても同様であり、両言語にみられる現象が質的に同じと言えるかどうかは十分に検証されていない。

以上のことを検討することには、理論的な意義がある。日本語や朝鮮語の韻律の理論的研究において、多くのモデルが局所的 F0 低下現象の作用域に対して何らかの韻律句を設定している。そして、そこで設定される韻律句は、階層的な韻律構造の中の一つのレベルをなしている。F0 低下現象が音韻的でないということになった場合、音韻レベルでその作用域を設定することの根拠がゆらぐことになり、韻律モデルの再考を迫られることになるのである。

2. 研究の目的

本プロジェクトでは、日本語および朝鮮語の諸方言を対象とする。目的は以下の二つである。すなわち、(i) 言語・方言によって局所的な F0 低下現象はいかなる現れ方をするかの記事、および (ii) 前述の現象が音声的か音韻的かの実験的検討である。

3. 研究の方法

本プロジェクトでは、上述の問いに対するアプローチとして、統語的曖昧文を利用する。統語的曖昧文とは例えば、「今朝つくった料理を捨ててしまった」のような文を指す。この場合、「今朝」は「つくった」を修飾するという解釈と「捨ててしまった」を修飾するという解釈の二つの解釈がある。多くの言語・方言において、このような場合に韻律に差異が生じ、その差異の一部は局所的 F0 低下現象というかたちであらわれる。しかし、ここには別の可能性もある。それは、実験課題において統語的曖昧文を読ませた場合、被験者の側に統語構造を積極的に区別しようという意識が働き、それによって統語構造にともなう F0 の差異が極端なかたちで捉えられてしまうというものである。つまり、本来音韻的で義務的現象でなく音声的でオプションな現象であるものが、課題の性質により明瞭なかたちで実現してしまうというものである。

そこで本プロジェクトでは、統語的曖昧文とそうでない文を用い、以下のようなアプローチをとる。

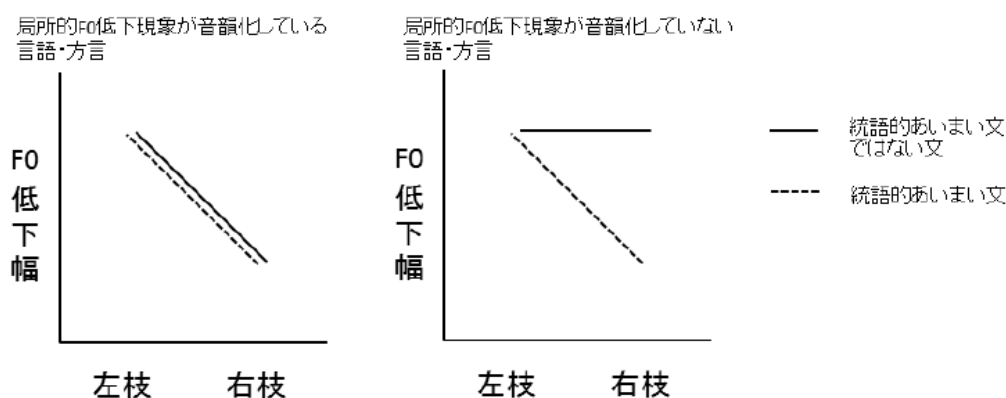
(1) 統語的あいまい文ではない文

- a. 「今朝つくった料理を今晚食べるつもりだ。」(左枝分かれ)
- b. 「明後日つくった料理を捨てるつもりだ。」(右枝分かれ)

(2) 統語的あいまい文

- a. 「今朝つくった料理を捨ててしまった。」(作ったのが今朝の場合: 左枝分かれ)
- b. 「今朝つくった料理を捨ててしまった。」(捨てたのが今朝の場合: 右枝分かれ)

(1) のように統語的あいまい文でない文を用いた読み上げ課題では、被験者は統語構造に意識を向けにくいと考えられる。一方、(2) のような統語的あいまい文を用いた読み上げ課題では、被験者は統語構造の差異に意識を向けることになると考えられる。もし局所的 F0 低下現象が音韻化したものであるならば、特定の統語的条件下で局所的 F0 低下現象が自動的に生じ、そこに統語構造への意識はかかわらないと予測される。すなわち、F0 に関して (1a) = (1b), (2a) = (2b) となると予測される。一方、局所的 F0 低下現象が音韻化していない場合は、(2) のように統語構造に意識が向けられたときにのみ構造の差異に対応するかたちで F0 の実現に差異が生じると考えられる。すなわち、(1a) = (1b), (2a) ≠ (2b) となると予測される。以上の予測を図示したのが以下の図である。このような文の読み上げ課題を各言語・方言に関して行い、左図、右図のうちどのような結果が現れるかにより、音韻化しているか否かを検討する。



4. 研究成果

F0 を分析する上では、様々な要因が F0 に影響を与えることに注意しなければならない。そこで、本プロジェクトの主たるテーマである F0 低下現象以外にも、影響を与える二つの現象についても検討した。一つは朝鮮語ソウル方言にみられるトーン変化であり、もう一つは朝鮮語慶尚道方言における弁別的ピッチである。

ソウル方言においては、かつてはピッチが語の弁別的な機能を担っていなかった。しかし、近年の多くの先行研究により、平音と激音において弁別上の主要なキューが VOT から F0 に移行しつつあることが明らかにされてきた。これは声調発生 (tonogenesis) であるとみることができる。また、// (「一」) ではじまる語のピッチが高く始まるような変化が生じていることも、先行研究で指摘されている。そこで、これらについて先行研究を整理するとともに独自の視点から議論した論考を発表した (業績：雑誌論文)。

慶尚道方言においては、伝統的にピッチが語の弁別的な機能を担っている。この方言における弁別的なピッチの体系は、日本語東京方言のアクセントと類似性を持つ一方で、異なる点もある。F0 低下現象を含む文レベルの現象と語レベルの現象がどのように相互作用を行うか、そして、そこから語レベルの体系を如何に解釈するかについて、研究発表を行った (業績：学会発表)。

以上をふまえて、問題の所在について慎重に議論し発表を行った (業績：学会発表)。その上で、前述の「研究の方法」に即して分析資料となる文を作成し、録音調査を行った。音声学・音韻論上の様々な要因を考慮しつつ統語的曖昧文およびそれと似た統語的曖昧文ではない文を作成するということに難航したが、文を作成して録音を実施した。分析にも予想以上の時間がかかっており、成果を公表するには至っていないが、近日中に成果の公表を行いたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

宇都木昭「朝鮮語ソウル方言における進行中のトーン変化 トーン発生と語彙拡散の観点から」『音声研究』21(2), pp.106-115, 2017年。(査読有)

〔学会発表〕(計5件)

宇都木昭「日韓両言語のイントネーション 共通点と相違点、およびそこから見える課題」韓国外国語大学校 CORE 事業団海外学者招聘講演会・韓日学術交流会, 2018年。

Akira Utsugi. "Prosodic phrasing and pitch range in Japanese and Korean." 日本音響学会 2017年秋季研究発表会, 2017年。

Akira Utsugi. "Kyungsang Korean tonal system from the perspective of sentence prosody." Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology 2016年。

Akira Utsugi. " : " 22

(BK21). 2016年。

市村葉子, 宇都木昭「「んだよね」の手続き意味の考察 「ね」の音調と発話解釈との対応に基づいて」日本語用論学会第18回大会, 2015年。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等：<https://sites.google.com/site/utsakr/>

6．研究組織

(1)研究分担者：なし

(2)研究協力者：なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。